

#### (4) 季節だより

三春の新年は、水かけ祭り<sup>まつ</sup>でやってくる。

正月になると、中妻地区<sup>にしかた</sup>西方の若者たちは、大滝根川<sup>たきねがわ</sup>の冷たい清流<sup>つめせいりゅう</sup>で身を清め、百数十段の石段をかけ登って<sup>しおがまじんじや</sup>塩釜神社<sup>しおがまじんじや</sup>に



水かけ祭り<sup>まつ</sup>

お祈り<sup>いの</sup>をしてから、そうれつな水かけ合戦<sup>がっせん</sup>をする。これからやってくる厳しい寒気<sup>きび</sup>にも負けず、無病息災<sup>むびようそくさい</sup>と子孫の繁栄<sup>しそんはんえい</sup>を願<sup>かん</sup>うてのこ<sup>かん</sup>である。ともすると、人間は自然をあまく見がちであることに対するけいけんな祈りでもあろうか。

三春に本当の寒さがやってくるのはこれからである。寒に



オオイヌノフグリ

はいると、川面<sup>かわも</sup>にたれ下がったヤナギの枝に、つららができ、冬のにぶい光をきらめかせている。野山はすっぽりと雪でおおわれ銀世界となる。

しかし、日が長くなるにつれ、やがて植物も動物も眠りから覚め活動を始める。日だまりの畑の土手いっばいに、青と白ぼかしのオオイヌノフグリ